NPO法人 長崎史談会

長崎学レポート

第10号
2022年9月1日発行
長崎学レポート
編集委員会
〒850-0861
長崎市江戸町5-8
第5一ノ瀬中央橋ビル

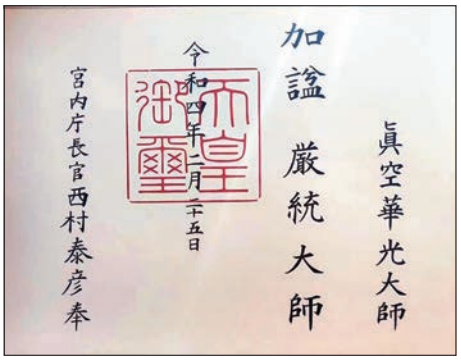
2022年度　第1回公開講座 2022年4月16日 ・ 第2回公開講座 2022年6月18日

第一回長崎学公開講座 第一部発表要旨

隠元禅師に贈られた国師号と大師号

原田　博二

本年は隠元禅師の示寂後三五〇年、今上天皇より「厳統大師」の大師号を贈られた。



隠元諡号「厳統大師」
（写真提供百田成玉氏）

隠元は、寛文一三年（一六七三）四月三日、八二歳で萬福寺（黄檗山・京都府宇治市）内の松隠堂において示寂した。

その前日の四月二日、後水尾法皇（一〇八代後水尾天皇）より「大光普照国師」の国師号を贈られたが、以後、五〇年の遠忌毎に国師号もしくは大師号が贈られている。

この国師号や大師号というのは、僧侶の尊称で、興禅大燈国師宗峰や弘法大師空海のように、国家を代表するような高僧に天皇や上皇から贈られた。

なお、在世中に贈られる場合は特賜、示寂後の場合は諡号といった。

わが国最初の国師号は、応長元年（一三一一）東福寺開山円爾弁円が花園天皇より贈られた「聖一国師」で、以後、主に禅僧に贈られた。

昭和一五年（一九四〇）までに国師号を贈られた高僧は七五人、その内、浄土宗は八人、律宗は一人、曹洞宗は五人、臨済宗は五一人、華厳宗は四人、天台宗は二人、黄檗宗は四人であった。

大師は、はじめは「釈迦大師」と釈迦の尊称であったが、時代とともに達磨大師や善導大師のように高僧も尊称として呼ばれるようになった。

わが国最初の大師号は、貞観八年（八六六）最澄と円仁（いずれも天台宗）が清和天皇より贈られた「伝教大師」と「慈覚大師」であった。ちなみに空海（真言宗）は、三番目で、延喜二一年（九二一）醍醐天皇より「弘法大師」を贈られた。

昭和一五年（一九四〇）までに大師号を贈られた高僧は二四人、その内、天台宗は五人、真言宗は六人、融通念仏宗は一人、浄土宗は一人、律宗は一人、曹洞宗は二人、浄土真宗は二人、日蓮宗は一人、時宗は一人、臨済宗は三人、黄檗宗は一人であった。

ところで、隠元が後水尾法皇より国師号を贈られたことは、以後例となり、五〇年の遠忌毎に朝廷から国師号や大師号を贈られている。

年代順に記述すると、享保七年（一七二二）の五〇年の遠忌には霊元上皇より「仏慈広鑑国師」を、安永元年（一七七二）年の一〇〇年の遠忌には後桃園天皇より「径山首出国師」を、文政五年（一八二二）の一五〇年の遠忌には仁孝天皇より「覚性円明国師」を、大正六年（一九一七）には大正天皇より「真空大師」を、昭和四七年（一九七二）の

この会は個人会員と法人会員の皆様により運営されています

メモリード
十八親和銀行
長崎バス
文明堂総本店
みろくや
福砂屋
松翁軒
森谷商会
小野原本店
浜屋

三〇〇年の遠忌には昭和天皇より「華光大師」を贈られたが、前述のように本年の三五〇年の遠忌には今上天皇より「厳統大師」を贈られた。

隠元に贈られた国師号と大師号

なお、明治五年（一八七二）の二〇〇年の遠忌に国師号等の沙汰がなかったのは、明治政府が同五年当時、黄檗派の臨済宗統合策を進めていたためと考えられる。

事実、政府は、明治七年（一八七四）黄檗派の臨済宗統合を断行したが、同九年（一八七六）には一転、黄檗派の黄檗宗としての独立を承認した。

このように隠元は、国師号は四回、大師号は三回、それも昭和天皇や今上天皇より贈られたのである。

大師の代名詞のようにいわれる空海も大師号は、「弘法大師」の一回だけである。

これは、後述するように浄土宗の開祖源空（法然）を除いて、他の高僧も同様で、例えば浄土真宗の開祖親鸞が「見真大師」を、曹洞宗の開祖道元が「承陽大師」を、同じく瑩山が「常済大師」をそれぞれ贈られたのは明治時代のこと、日蓮宗の開祖日蓮が「立正大師」を贈られたのは大正時代のことであるが、いずれもこの一回贈られただけであった。

ところで、浄土宗の開祖源空は、元禄一〇年（一六九七）示寂後四八五年にして東山天皇より最初の大師号「円光大師」を贈られ、さらに五〇〇年の遠忌に中御門天皇より「東漸大師」を贈られた。

以後、五五〇年の遠忌に桃園天皇より「慧成大師」を、六〇〇年の遠忌に光格天皇より「弘覚大師」を、六五〇年の遠忌に孝明天皇より「慈教大師」を、七〇〇年の遠忌に明治天皇より「明照大師」を、七五〇年の遠忌に昭和天皇より「和順大師」を、八〇〇年の遠忌に平成天皇より「法爾大師」をそれぞれ贈られている。

このように、源空も五〇〇年の遠忌以降、五〇年の遠忌毎に大師号を贈られている。

ということは、五〇年毎の遠忌に大師号もしくは国師号を贈られたのは、隠元と源空の二人だけであった。

しかし、隠元が寛文一三年（一六七三）最初の「大光普照国師」を贈られ、五〇年の遠忌に「仏慈広鑑国師」を追贈されたのは享保七年（一七二二）のこと、これに対して源空が宝永八年（一七一一）の五〇〇年の遠忌で「東漸大師」を贈られ、五五〇年の遠忌に「慧成大師」を追贈されたのは宝暦一一年（一七六一）のことである。

ということは、五〇年の遠忌毎に大師号もしくは国師号を贈ることが例となったのは隠元の享保七年（一七二二）の五〇年の遠忌からで、源空のそれは隠元の例に倣ったものと考えられる。

第二回長崎学公開講座 第一部発表要旨

福地信世と阿蘭陀万歳

大田　由紀

阿蘭陀万歳は東京生まれ

長崎くんちの名物「阿蘭陀万歳」は、くんちのために創作されたものでも、長崎で誕生したわけでもない。

鈴木信太郎画「阿蘭陀万歳」（NBC長崎放送所蔵）

初演は、昭和八年（一九三三）東京での「花柳舞踊研究所第一六回公演会」である。この研究会は、日本舞踊の花柳流二代目家元花柳寿輔が、舞踊の創作と古典舞踊の技術的な練磨を目的に定期的に開催しており、阿蘭陀万歳は前者にあたる。

福地信世立案、音楽は町田嘉章、振付花柳寿輔、万歳を花柳寿太郎、才蔵を花柳三之輔が演じた。寿輔は以下のように記している。「日本に漂流した二人のオランダ人が生活のために日本の『萬歳』をおぼえて祝儀にまわっているうち、故国オランダを思って悲しむ、というものですが、私はこれにかなりコミカルな振りを入れてやってみました。（略）万歳の方には、得体の知れない中啓を持たせ、才蔵の方には、鼓のような形をした木を持たせ、これを使って『三河万歳』の気分を出しました」（「よみうり演芸館・芸談」読売新聞一九六〇）

三味線、太鼓などの邦楽器は一切使わず、オペラ歌手四谷文子のソロに、ピアノの伴奏のみという斬新な演出であった。

長崎での阿蘭陀万歳上演

東京初演の舞台を観て感激したひとりに、長崎町検番の萬歳がいた。

当時長崎では、翌年に開催される博覧会の話題で持ちきりであった。

興奮気味の萬歳の土産話に、町検番の関係者は膝を打った。東京で評判をとった阿蘭陀万歳を上演したら、新し物好きの長崎人はきっと大喝采するに違いない。

幸い、初演で踊った東京の花柳寿太郎は長崎町検番の専属師匠で、花柳流の幹部でもあったため、家元から上演の許しも得ることが出来た。

長崎市主催国際産業観光博覧会は、昭和九年（一九三四）三月二五日から六〇日間開催され、六三万人もの人を集めた大イベントであった。阿蘭陀万歳は、町検番の演目の一つとして、会期中五二回上演された。

東京の初演は、万歳と才蔵の二人だけの踊りであったが、芸者や唐子が加わり、賑やかで華やかな演出となった。第一景は長崎出島、第二景は出島阿蘭陀屋敷。万歳役の萬歳（はからずも役名と芸名が同じ）の駘蕩な大様さ、歳三役の凸助の洒脱な軽妙さは対照をなして大評判となった。

そして一五年後、昭和二四年（一九四九）聖フランシスコ・ザビエル渡来四〇〇年祭が五月二九日から二週間にわたり日本各地で執り行われ、長崎はその皮切りであった。

市は宝塚劇場（本石灰町）で国内外の参列者のために演芸会を開催、そのなかで「阿蘭陀万歳」を上演した。主役は町検番の若清と光菊、指導したのは、かつての萬歳と凸助であった。

このとき鈴木信太郎画伯が描き、二科展に出品した。明澄で陽気な作風は、戦後の索漠とした気持ちを和ませたのか、評判をよび、鈴木画伯はそれ以降も阿蘭陀万歳をモチーフにした作品を数多く描いた。「長崎の阿蘭陀万歳」として全国に知られることになった。

一躍有名になった阿蘭陀万歳を、長崎くんちの本踊の演目としたのは、昭和二六年（一九五一）戦後初めての踊町が巡ってきた新橋町であった。町内には、かつての凸助が花柳寿太満として日本舞踊の師匠をしていた。

これが「阿蘭陀万歳」の長崎くんち初お目見えとなる。主人公ふたりのコミカルな踊りと、唐子や町娘なども登場し、華やかで明るい演目は、原爆からの復興途上の街に彩を添えた。その後も阿蘭陀万歳は人気をよび、長崎くんちではこれまでに二三回奉納されている。

『長崎市主催国際産業観光博覧会協賛会誌』から転載

福地信世とは

阿蘭陀万歳の立案者である福地信世は、明治一〇年（一八七七）東京生まれ、長崎市出身でジャーナリストの草分けとして著名な福地桜痴（本名源一郎）の五男で、兄四人は早世している。

地質学会でも屈指の学者であったが、演劇や舞踊に造詣が深く、演劇評論家、舞踊の作者としても活躍した。「阿蘭陀万歳」のほか、京劇を翻訳した「斬貂」や「思凡」、能から題材を得た「綾の鼓」などの新作舞踊を書き、当時の舞踊界では高く評価された。辛口の批評家であったが、俳優や舞踊家からは信頼された。

父桜痴も劇作家として活躍、明治二二年（一八八九）歌舞伎座を開設、座付きの狂言作家となった。信世はその父の影響を強く受けて育った。

短い五分刈り、袴、素足に赤緒の麻裏草履という地質学者らしからぬ出で立ちで、劇場や楽屋に現れたという。赤緒の麻裏草履は、筆頭の狂言作家だけに許されていたもので、父桜痴への尊敬と憧憬の表れであった。

現在も、尊敬する父親の故郷の長崎くんちで、阿蘭陀万歳が踊り継がれていることを泉下の福地信世に知らせたい思いである。

参考文献
兒玉秀雄他編纂『福地信世遺稿』

第一回長崎学公開講座 第二部発表要旨

長崎甚左衛門の大村藩退去

野田　和弘

開港当時の長崎の領主は、戦国大名大村純忠の重臣長崎甚左衛門純景で、城下は今の桜馬場、夫婦川、新大工一帯を中心とする狭い領域であった。

元亀二年（一五七一）長崎が開港され新しい町が建設されたが、天正八年（一五八〇）大村純忠は、この長崎と茂木をイエズス会に寄進した。

しかし、天正一五年（一五八七）豊臣秀吉は、イエズス会から長崎と茂木を没収、自身の直轄地とした。

江戸幕府も引き続き長崎を天領としたが、長崎代官の村山等安らが、天領である長崎と浦上の間に、純景が知行する大村藩領があるのは、なにかと不都合であると訴えた。幕府もこれを認め、慶長一〇年（一六〇五）純景の知行地は天領となり、代わりに大村藩には浦上の北部が与えられた。これにより純景は父祖伝来の

長崎を失ったのである。

大村藩主大村喜前は、純景に時津村七〇〇石を代わりに与えようとしたが、なぜか純景はこれを断り、大村藩を退去し筑後柳川藩の藩主田中吉政に仕えた。

退去の理由は、純景がキリスト教を棄教した藩主喜前を嫌い、キリシタンに比較的寛容であったといわれる吉政を頼ったともいわれるが、確証はなく定かではない。

純景は、元和六年（一六二〇）田中家断絶後、大村藩に戻り、横瀬浦（西海市）に隠居し、元和七年（一六二一）七三歳で没したといわれる。

長崎甚左衛門居宅跡
（長崎県西海市西海町横瀬郷）

第二回長崎学公開講座 第二部発表要旨

隠元禅師ゆかりの国内の寺院～瑞龍寺～

原田　博二

加賀藩三代藩主前田利常は、兄で二代藩主前田利長の菩提を弔うために曹洞宗宝円寺（富山県高岡市）を利長の法名瑞龍院にちなんで瑞龍寺と改め、利長の三三回忌に当たる正保三年（一六四六）からその大改築に取り掛かった。

そのようななか承応三年（一六五四）隠元が渡来、その情報が各地に伝えられた。

利常は、瑞龍寺に黄檗の様式を取り入れようとして、曹洞宗天徳院（石川県金沢市）の住職鉄心道印を興福寺（長崎市）、さらには普門寺（大阪府高槻市）に派遣、隠元に黄檗禅について教えを請うている。

瑞龍寺には、現在、隠元が揮毫した「高岡山」「大雄殿」「瑞龍寺」の額が山門、仏殿、法堂にそれぞれ掛けられている。

しかし、金沢の天徳院は、利常の正室珠姫（二代将軍秀忠の娘・法名天徳院）の菩提寺、加賀藩の最も重要な寺院の住職が隠元に接近したのである。

このことについて、筆者は、単なる揮毫の依頼などではなく、隠元を本気で瑞龍寺の住職に招請しようとしたのではないかと考えている。

しかし、万治元年（一六五八）四代将軍家綱が隠元に謁見、さらには萬福寺造営が決定すると、流石の加賀藩も隠元の招請を断念せざるを得なかったのである。

瑞龍寺の大改築は、その後も継続され、完成したのは、着工から約二〇年後の寛文三年（一六六三）のことで、それは利長の五〇回忌の年であった。

隠元書額「瑞龍寺」（瑞龍寺蔵）

法人会員紹介

（株）浜屋百貨店

長崎市浜町七番一一号

（株）浜屋百貨店

浜屋百貨店の創業は、昭和一二年（一九三七）のこと。日本が戦争へと突き進んでいる頃であった。

当時、市内には岡政百貨店があるのみで、市内外からは、新しいデパートの開業を望む声が強かった。

そのようななか開店したものの、戦争、原爆投下、敗戦後の物資の統制など、まさに苦難の連続であった。

社訓である「日々新又新（ひび新たにして、また日に新たなり）」の精神で、昨日より今日、今日より明日と、地域の消費生活と文化を向上させようと歩みを進めた。

その結果、市内外から身近に親しまれるデパート「浜屋」として大きな評価をいただいている。

昭和五七年（一九八二）の長崎大水害では、地下と一階が冠水、甚大な被害のなか、取引先の方々の素早い協力と、従業員の不眠不休の連携で、いち早く被災者の方々へ物品を供給することが出来た。

創業者の藤木喜平翁は、都市の発展には文化が必要不可欠との信念から長崎学の発展にも尽力した。

今年は創業八五年、浜屋百貨店は原点に立ち返って、市内外のショッピングの中心として、さらには地域の憩いの場として、さらなる飛躍が期待される。

昭和14年（1939）開店当時の店内